

2014&2015

# JOI Report

11th & 12th



## ジョイ JOIプログラムとは

日米草の根交流コーディネーター派遣(英名 Japan Outreach Initiative: JOI)プログラムは、米国の草の根レベルで日本への関心と理解を深めることを目的に、地域に根ざした交流を進めるためのコーディネーターを2年間派遣する事業です。活動を通して日本の草の根交流の担い手を育成するのも本プログラムのねらいです。コーディネーターは、日本との交流の機会が比較的小さい米国の南部・中西部地域の大学や日米協会をはじめとする地域交流活動の拠点に派遣され、その地域の小学校から大学までの教育機関、図書館、コミュニティセンターなどを訪れ、日本人の生活ぶりや、伝統芸能、日本語など、日本の幅広い文化を紹介する活動を行います。

JOIプログラムは、国際交流基金日米センターと米国の非営利団体ローラシアン協会が2002年度より共同で実施しています。

**CGP** 国際交流基金日米センター  
The Japan Foundation  
Center for Global Partnership

日米が共同で世界に貢献し、緊密な日米関係を築くことを目的として、1991年に国際交流基金に設立されました。両国のパートナーシップ推進のための知的交流と両国の相互理解を深めるための地域・草の根交流の2分野で交流事業を行っています。

### TOKYO OFFICE

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1 TEL.03-5369-6072 FAX.03-5369-6042

<http://www.jpf.go.jp/cgp/>



THE LAURASIAN  
INSTITUTION

ローラシアン協会  
The Laurasian Institution

「異なる文化を背景とする人々が協力し、意義ある国際交流環境を創造していく」ことを基本理念に、1990年に米国イリノイ州に非営利法人として設立されました。日米両国に事務所を設置し、国際教育・異文化交流教育に主眼を置いたプログラムの企画・運営を行っています。主にアジア・アメリカ・ヨーロッパ大陸間で異文化理解を深めるための教育プログラムや情報の提供に関する事業を展開しています。

<http://www.laurasian.org/joi/>

再生紙使用

## JOIプログラム第11期・第12期 コーディネーター 活動報告

2年間の任期を終えた第11期(2012年8月~2014年7月)、第12期(2013年8月~2015年7月)のコーディネーターから、それぞれの活動体験談を寄せていただきました。第1~10期の報告や今後の募集情報など、詳細はウェブサイトをご覧ください。

<http://www.jpf.go.jp/cgp/fellow/joi/>

JOIプログラム





## JOI 第11期

(2012年8月～2014年7月)

## 乗上 恵里香

Norikami Erika

カンザス大学ローレンス校  
東アジア研究センター  
The University of Kansas  
Center for East Asian Studies  
(カンザス州ローレンス)

大学時代、米国コロラド州に留学。大学卒業後は英語教育会社に研修コーディネーターとして就職。その後、子供英語インストラクター養成講座に通い、JOIプログラム応募を決意。

カンザスを出発する前日、荷物の整理を終え、スーツケースに全ての物を詰め込んでいました。その中の大半は、いただいたお礼の手紙や色紙、プレゼントなど、本当に沢山の物が詰まっていた。それを見たとき、2年間のここでの生活に終止符を打つのだと実感しました。これらの皆さんからいただいたものは、私の一生の宝物であり、これからの人生の支えになっていくでしょう。

カンザスでの生活を振り返ってみると、本当にあっという間に過ぎて行きました。思い起こせば、車の運転もままならなかった最初の数カ月。帰国一ヵ月前には3時間かけて、隣町の大学まで運転をして、アウトリーチ活動を行いました。当初はそんな事ができるとは思っておらず、自分の活動ぶりに驚きを隠せません。

私の2年目の活動は1年目の活動継続とともに、新しい事にも挑戦していきました。

1つ目は1年目と継続して、学校・コミュニティ団体の訪問を行いました。「生徒達がとても楽しんで、日本文化を学んでいた。もう一度クラスに来て欲しい」。そう言われ、何度も同じ学校に行くことができました。とても嬉しく、自分のやる気に繋がりました。



小学校の日本語クラブ

また、2年目は同じ訪問先だけでなく、新しい学校、コミュニティ団体の訪問にも力を入れました。時には何時間もかけて、牛や馬しかいないような道を走り、田舎の学校へ行くこともありました。

新規の訪問先と言えば、老人ホームでの活動が印象に残っています。出席者の方から日米の戦争時代の話や体験を聞き、胸を痛めるとともに、自分自身にとっても大変勉強になりました。

2つ目は平塚・ローレンス市の姉妹都市支援活動の継続です。1年目の夏には通訳として、平塚市から訪問した約20名の中・高生と共に、カンザスの観光地を回りました。現地の学生だけでなく、こうして日本の学生と交流を持てたことも、貴重な体験でした。

平塚・ローレンス市の青少年交流活動は毎年行われています。しかし、ローレンス市からの人数確保は毎年困難であり、どうにかできないかと相談を受けていました。それを知り、2年目は姉妹都市宣伝活動を行うため、地元の中学校、高校を何度も訪問し、青少年交流活動の説明、日本文化の紹介を行いました。そのおかげで、今年は25名以上の応募があり、その中から20名を選抜することができました。地道な活動により、多くの学生が日本に興味を持ち、応募してくれた事は本当に嬉しかったです。

青少年交流団が決定されると、次に待っているのは月一度のオリエンテーションです。それにあたり、ホームステイ・ハンドブックの作成を頼まれました。内容は基礎的な日常会話、価値観の理解、基本的なマナーの習得を目指したものです。この作成したハンドブックは今後も使用される予定で、時間をかけて作成した甲斐がありました。

2年という短い間でしたが、姉妹都市活動の一員として携わり、協力できたことに誇りを持っています。これから、平塚・ローレンス市の活動が継続され、さらに活発になっていくことを願っています。

3つ目は大きなイベントの開催及び、参加です。特に印象に残っているのは、カンザス大学で行った日本祭とボーイスカウト団体によって開催されたスカウティング500です。

スーパーバイザーの協力により、私が所属するセンターと美術館が協力して、日本祭を行いました。午前中には教師向けワークショップを開催し、日本の教育制度や伝統文化について紹介しました。午後には茶道、和菓子について教授の方からの講義、美術館での茶道具

展示を行いました。準備には時間がかかり大変でしたが、約200人の一般客が訪れてくれました。2年目には日本祭という大きなイベントを開催でき、協力して下さった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。



お世話になった米国中部日米協会の方々

そして、一番参加者数が多かったイベントはスカウティング500です。1,200のボーイスカウト団体が参加し、1,000人以上の子どもたちが私たちのブースに立ち寄ってくれました。書道体験、お箸の使い方、鉢巻き作りなど、様々な日本文化体験コーナーを用意しました。私自身も多くの子ども達と触れ合うことができ、とても楽しい時間を過ごしました。

この2年間、突っ走るようにアウトリーチ活動を続けてきましたが、最終的には17,000人の人々に日本の種を植えることができました。



ボーイスカウトでのイベント

これも私の周りの方々のおかげで、それをなくしては、多くのアウトリーチ活動は成立しませんでした。終始サポートして下さった私のスーパーバイザー、東アジア研究センター職員の皆様、日米協会の皆様、2年間という長い間、娘のように受け入れてくれたホストファミリーには、心より感謝の気持ちを申し上げます。





## JOI 第11期

(2012年8月~2014年7月)

## 蓮井 頼子

Hasui Yoriko

 イリノイ大学東アジア・太平洋研究センター  
 University of Illinois  
 Center for East Asian and Pacific Studies  
 (イリノイ州シャンペーン)

大学時代に中国に留学。卒業後はシンガポールに渡り就職。数年のシンガポール生活を通して異文化間交流・理解の大切さ、そして日本の文化の素晴らしさに気づき、もっと世界中の人に日本を知ってもらいたいと思い、JOIプログラムに応募。

2年前、不安だけでイリノイ州シャンペーンに降り立ったことを今でも覚えています。一体どんな生活が待っているのか、JOIコーディネーターとしてきちんと大学やコミュニティのために貢献できるのかと不安と期待が入り混じった複雑な気持ちでした。しかしそんな不安もしばらくすると消え、アメリカでの新しい生活を楽しんでいる自分がいました。最初は右側通行に慣れず度々逆走してしまうこともあった車の運転も、慣れた頃にはコーン畑を横目に見ながら爽快に道路を走り抜ける感覚が好きになり、いつの間にかドライブすることが趣味になっていました。



学校訪問

「たくさんの人と日本文化の素晴らしさを共有したい、日本を好きになってもらいたい」と思い応募したJOIプログラムでしたが、2年間で振り返ってみて十分多くの人に日本文化を知ってもらえたと思う反面、もう少し頑張ればもっとアウトリーチができたのではないかという思いも残っています。1年目は学校訪問があまりできなかったこともあり、2年目は精力的に学校訪問を行うことにしました。まずは、私がJOIコーディネーターとしてイリノイ大学に在籍しているということを宣伝する事から始まりましたが、この宣伝活動が予想をはるかに超えて難航しました。

当初私は、活動拠点周辺ではあまり知られていない日本文化だからこそ学校の先生方が興味を持ってプレゼンテーションの依頼をして下さるという安易な考えでいました。しかし、いくつかの学校に連絡を取っても一向に返事が来ないという状態がしばらく続きました。誰も日本文化に関心がないのではとさえ思い始め、どうしていいのかわからないまま、でも根気よく連絡を

し続けていると、ある日、プレゼンテーションの依頼が来始めました。このようにして、少しずつゆっくりとしたペースで学校訪問を続けていくうちに、口コミでも情報が広まって多くの学校から依頼が来るようになりました。

訪問先の先生からは、イリノイ州南部の学校は国際交流が非常に少ないので、絶対に行ったほうが良いというアドバイスをいただき、南部にある学校にも足を伸ばしました。時には片道2時間以上もかかる学校へ行くこともあり、早朝4時起きで家を出発しなければいけないような体力的にかなりきつい日もありましたが、生徒たちのうれしそうな顔と活き活きとした目を見ると本当に来てよかったと思うことができました。

プレゼンテーションの内容は、書道、折り紙、日本の学校生活や食生活、ビジネスマナーなど様々でした。毎回プレゼンテーションを終えた後、「いつか絶対に日本に行きたい」と生徒たちが言ってくれたことや「生徒たちが世界に目を向ける重要な機会になりました。来てくれて本当にありがとう」という先生からの言葉も活動の大きな支えとなりました。学校訪問は小さく地道な活動ですが、日本ファンを確実に増やすことができ、それを直接感じることができる素晴らしいものでした。



インターナショナルフェスティバル

2年間の活動の中で一番大きく、大変だったのが2013年9月に行った英語落語イベントです。大変だった分、思い入れがあり一番心に残っているイベントでもあります。北米ツアーでお越しになる落語家桂三輝さんの公演会場として、在シカゴ総領事館よりお話をいただきました。私の所属先であった東アジア・太平洋研究センターのセンター長が会場を確保して下さい、私はイベントの宣伝に全力を注ぎました。落語という特異な伝統芸能をどのように紹介するべきか、どうしたらより多くの人が見に来てくれるのか悩む日々でした。



落語イベント

そこで、ラジオ、新聞、関係部署のホームページ、学校訪問、知り合いによる口コミなど、思いつくすべての手段で宣伝をしました。学校訪問では、わずかな時間でいいので先生にお願いし、落語のプレゼンテーションをさせていただきました。コミュニティの日本人の方々も、私の代わりに多くの人に口コミでイベントを宣伝してくださいました。そんな努力が実ったのか、当日、200席ほどある会場はありがたいことに満員となり、会場は終始爆笑の渦に包まれていました。改めて観客みなさんの笑顔を見た時、嬉しさのあまり涙がこぼれました。

この2年間、私がJOIコーディネーターとして務め上げることができたのは、私を支えてくださった方々のおかげです。オフィスのみなさん、コミュニティのみなさん、JOI 11期のメンバー、そして日々心地よい生活を提供して下さいたホストファミリーには、言い表しような特別な思いがあります。苦しい時、私を応援してくれたみなさんのことを私は仲間だと思っています。2年間で広げた日本文化の輪は、仲間と一緒に築き上げたものであり、今後もこの輪が広がり続けることを願います。

最後に、このような素晴らしい機会を与えて下さった国際交流基金日米センター、ローラシアン協会、イリノイ大学のみなさまに心から感謝申し上げます。



## JOI 第11期

(2012年8月~2014年7月)

湯田 晴子

Yuda Haruko

バージニア大学  
アジアインスティテュート  
Asia Institute, University of Virginia  
(バージニア州シャーロットビル)

高校時代のオーストラリア留学、大学時代のタンザニア留学等を通して国や異文化を超えた交流に興味を持つ。日本の大学院の教育学研究科にて修士課程を修了後、これまでの経験を活かしたいと思い、JOIプログラムに応募。

私のJOI 2年目の夏は、コミュニティカレッジ間をつなぐシンポジウムでのプレゼンテーションから幕を開けました。夏休み中にバージニア大学において催された1週間のシンポジウムには、州内の5つのコミュニティカレッジから参加者が集まり、アジアやロシア、アラブ諸国などの文化に関する講義が行われました。私の2年目の活動は、そこで出来た繋がりを基に広がっていくことになりました。



茶道ワークショップでのデモンストレーション

9月にはシンポジウムに参加していた先生方からのリクエストをいただき、バージニアの南西部を訪問しました。カレッジがあるリッチランドへは、シャーロットビルから車で4.5時間ほどの道のりでした。3泊4日のビジネストリップを計画し、シンポジウムで出会った先生方の企画の下、幼小中高、大学と様々なレベルの学校を訪問しました。4日間で行ったプレゼンテーションの参加者は550人にも上りました。どこに行っても私の話を熱心に聴く学生や先生方をみて、こうして日本人として遠く離れた地に出向くことの意義を改めて感じました。ここで私のプレゼンテーションを聞いた小学生の保護者から12月頃に連絡をいただき、「娘のクリスマスプレゼントにあなたが紹介していたランドセルを買いたいんだけど、どこで買えるのか教えてくださいませんか」と聞かれたこともありました。

翌月の10月にはシャーロットビルから比較的近くにあるブルーリッジコミュニティカレッジ(以下BRCC)を訪問することができ

ました。こちらにも3日間滞在し、茶道や日本伝統芸能、ポップカルチャー、福島原発問題などといったトピックをお話しました。BRCCには日本語のプログラムはありませんでしたが、オンラインで日本語のクラスを取っている学生や、独学で日本語を勉強している学生が何人もいたことに驚きました。

JOI最終年である2年目の目標には、私がいなくなった後にも“使えるモノ”を残す、といったものがありました。

日本に関する情報や教材が比較的手に入りやすいシャーロットビルと、日本に関する興味関心が強い人々が多い地域とをつなぐことがしたい、という私の1年前からの思いは、2年目を迎えて一層強くなっていました。この思いを実行するつもりで、シャーロットビルにあるピーデモント・バージニア・コミュニティカレッジ(以下PVCC)の先生方の力を借り、日本関連でコミュニティカレッジ間をつなげることを目的としたイベントを企画しました。

PVCCには日本語プログラムがあることに加え、百人一首や書道、茶道などの日本文化に詳しい学生がたくさんいます。また、熱心な日本語の先生の下、日本文化に関するイベントも活発に行われています。対してBRCCでは、日本語のクラスはなく、日本に関する文化的なイベントを行うためのリソースも手に入りにくい状態でした。しかしBRCCには、日本文化に大変興味のある先生方や学生が山ほどいます。わずか1時間半ほどしか離れていないこの2つのカレッジを1度つなぐことができれば、私が日本に帰った後も何かできるのではないかと。そう思い、この二つのコミュニティカレッジの先生と協力し、両カレッジの職員や学生を対象とした茶道ワークショップを開催することにしました。



コミュニティカレッジでのプレゼンテーション

ワークショップでは、11年間にも渡って茶道を勉強しているというPVCCの学生を招いて、デモンストレーションや茶道の歴史、哲学についての講義を行っていただきました。

ワークショップ後半には参加者同士がペアをつくり、パートナーにお茶を立てて出す、といった茶道体験も行いました。参加者の方々にはとても満足していただいたようで、とりわけBRCC側の方々からは、「これをきっかけにシャーロットビルで行われているイベントの存在を知ることが出来た」「日本文化をもっと深く知ることの出来る素晴らしい出会いがあった」など、うれしい言葉をいただきました。



小学校訪問での集合写真

そして何より、ワークショップで出来たつながりを通して、PVCCとBRCCが共同で日本文学読書クラブを設立する、というアイデアも生まれました。2つのカレッジの先生方や学生達がこのようにして繋がるきっかけを作れたことを、大変嬉しく思いました。

コミュニティカレッジ関係以外にも、1年目に引き続き学校訪問やコミュニティ訪問を行いました。夏休みには、シャーロットビルで初めての試みである中学生対象の日本語サマーキャンプを企画し、高校の日本語の先生と一緒に試行錯誤で実施しました。課題も多く残りましたが、費用や場所の確保、宣伝の方法など、キャンプを実施するために必要なものを明確にすることができました。今年の経験を生かして来年も続くのではないかと考えています。



高校の日本語のクラスを訪問した際の集合写真

この2年間を通して、素晴らしい出会いと様々なスキルを手に入れることができました。この機会を私に与えてくださった全ての皆様に感謝いたします。





## JOI 第12期

(2013年8月~2015年7月)

片岡 愛  
Kataoka Ai

バルドスタ州立大学  
Valdosta State University  
(ジョージア州バルドスタ)

高校、大学時代のカナダ、アメリカ留学をきっかけに異文化に興味をもつ。留学先の大学で日本クラブ運営の経験や台湾の小学校で日本文化を紹介したことがきっかけで日本文化紹介に興味をもちJOIプログラムに応募。

派遣先のバルドスタで過ごした2年間は驚くほどあっという間に過ぎていきました。何もなかったところから仕事と生活の基盤を作り上げるので精いっぱいだった1年目が過ぎ、活動の場を広げることを目標にした2年目はより多くの人に日本の文化を紹介することができました。

2年間のJOI活動の中で一番苦労したことはアウトリーチ先を探すことでした。活動を認知してもらうまでにはたくさんの壁に直面し、最初の数カ月は活動できる場所を開拓することに多くの時間を費やしました。学校の先生や担当者へ送ったメールの返信がもらえず落ち込んだり、なかなか活動場所が見つからず焦る日々が続きました。そんな中、アジア教育に力を入れている大学の担当者が集まる会議に参加し関係者の人を紹介していただいたり、また毎年開催されるバルドスタ市のインターナショナルフェアの担当者と顔合わせをするなどして人脈を広げることから始めました。



箸チャレンジ

少しずつ活動が軌道に乗ってきたころに訪問先の小学校で出会った先生に言われた言葉が印象に残っています。「この地域に住んでいる子供たちは経済的に厳しい家庭環境の子供が多く、外国はおろか国内旅行もできない家庭が多い。そんな中、あなたが日本人の代表として自国の文化を紹介する活動は、子供たちに異文化を認識させ、彼らの視野を広げ、世界へと飛び立つ可能性を作る道筋となるでしょう」。この言葉はアウトリーチ活動の意義を再認識するきっかけに

なりました。異文化交流をする機会が少ないこの地域で可能な限り多くの場所に外向き活動していきたいと強く思い、これを2年目の目標にしました。活動範囲をフロリダ州南部からジョージア州北部までに広げ、依頼があれば車で3時間から4時間、時には6時間かかる場所にも外向きました。各地で行われるインターナショナルフェアにも積極的に参加し、その結果2年間で延べ約2万人の方と出会い日本文化を紹介することができました。



小学校での折り紙ピカチュウ作り

アウトリーチ場所は主に小、中、高、大学、図書館やYMCAなどで、一番印象に残っているのが小学校及び中学校訪問です。プレゼンテーションの内容には生徒たちの身近な関心事である食生活や学校生活、衣服などを盛り込みました。その他に浴衣の着方デモンストレーションや折り紙、箸の使い方などの体験学習を取り入れました。最初は興味がなさそうな生徒たちも途中から興味をもって聞き入ってくれるようになり、知らないことをもっとよく知ろうと質問をしてくれたりしました。楽しみながら日本文化を知ってもらうことができました。生徒たちからだけではなく、先生からも「とても教育的な内容でした」「子供たちにはもちろん、私たち教師にとっても充実した内容でした。ありがとう」と感謝の言葉をいただき、とても嬉しくやりがいを感じました。現地に滞在して本当に自分が役に立っているのか不安になる時もありましたが、このような言葉や生徒たちの喜ぶ顔に支えられ2年間頑張ることができました。



図書館アウトリーチでの仮面づくり

バルドスタ市では毎年インターナショナルフェアが開催されます。アジア、アフリカを中心とした各国の代表者たちがプレゼンテーション、パフォーマンス、体験活動を通して自国の文化を伝えるイベントです。2日間で約3,000人が来場します。2年目は日本ディレクターとしても活動し、会場設営からプレゼンテーション、パフォーマーへのダンス指導や当日の動きの指示を担いました。パフォーマンスでは地元の中学生、高校生と日本人留学生に協力してもらい、日本の民謡であるソーラン節と和服の帯の結び方を実演しました。アメリカ剣玉協会の方々にも参加していただき、プロの剣玉パフォーマンスを披露してもらいました。

その中でも一番時間を費やしたのはソーラン節のダンス練習です。週1回4カ月にわたり練習が続きました。途中で飽きてしまう生徒もいて、長期間モチベーションを維持させる指導の難しさも痛感しました。音と動きがかみ合わず、一人一人の動きもバラバラだったダンスでしたが、長期間の練習の甲斐があり、本番では息の合った踊りを披露してくれました。そのダンスを見た時は、彼女たちを誇らしいと思う気持ちでいっぱいになりました。

ボランティアへの指導やパフォーマーへの指揮等とても忙しく大変でしたが、イベント全体を通してやり遂げた充実間は格別でした。それは同時に自分の自信にもつながりました。



地元中学生によるソーラン節

この草の根交流活動は、異文化を学びながら人種や国を超えてお互いを理解するきっかけになるものだと思います。その一員としてこの活動に携われたことは私にとって貴重な経験となりました。

最後に、この機会を提供してくださった国際交流基金及びローシアン協会の皆様、現地で支えてくれたスーパーバイザー、日本人留学生、インターナショナルフェアのディレクター、また受け入れてくださった機関の関係者すべての人にこの場を借りて感謝いたします。





## JOI 第12期

(2013年8月~2015年7月)

## 庄寄 由紀

Shozaki Yuki

カルチャーオール  
CultureALL  
(アイオワ州デモイン)

高校時代にアメリカへ留学。本物の「異文化交流」そのものに感動、魅了される。大学卒業後にオーストラリアで日本語教師アシスタントとして働き、帰国後は公立中学で講師(英語)として働く。その後日本語教師養成講座を受講中、JOIプログラムに出会い、「これぞ自らの経験を生かせるチャンスでは!」と思ひ応募。

およそ2年と半年前、募集要項を見てすぐに「これだ!」と思ひ応募を決意はしたものの、やる気と情熱で頭がいっぱいだったその反面、頭の片隅にひっそりと存在していた不安や心配と格闘しながら、募集締め切りのギリギリまで考えを煮詰まらせていたのを今でも鮮明に覚えています。

そして、実際に選出・派遣をしていただいて、2年間という任期を全うした今心から思うことは…月並みな表現かもしれませんが、ただただ「挑戦してよかった! JOIコーディネーターとして働けて本当に良かった!」ということです。

初めは少し長くも思えた2年という月日も、今となっては「これは現実だったのだろうか」とさえも思えるほど早く、めまぐるしく、そしてとても充実したものでした。



アウトリーチ (中学校) の様子

私という人間を溢れんばかりの大きな愛で受け入れてくれたアイオワの土地も人も、そして日本から私の活動を支えてくださった家族や友人、そして国際交流基金とローラシアン協会を始めとする関係者の皆様に心からの感謝の気持ちでいっぱいです。

2年目に入ると、1年目の頑張りの甲斐もあって、アウトリーチのコネクションも一通り数が拡大し、更にはかつてお仕事をさせていただいた皆様の口コミを伝い、ワークショップのアウトリーチ活動の他にも様々な方面から色々な種類のお仕事をいただくようになりました。

その中でもひとつ印象深かったのは姉妹都市関連の事業やプログラムのお手伝い

です。アイオワ州は戦後すぐに山梨県と姉妹都市提携を結び、この姉妹都市提携は日米間の中では最も古く、長い歴史があると言われています。そして何よりもすごいのは、それだけ長く関係を続けていることはもちろんですが、何といてもその活発さです。元来行われていた学生間の交流プログラムはもちろん、私の赴任中には新しくビジネスに焦点を当てた企業人や教師向けの交流プログラムなども遂行されました。

私は主に、計画の段階では日米両者の文化や礼儀を考慮したプログラム作りのアドバイス、またプログラム遂行中は通訳として同行・常駐し両者間の橋渡しをさせていただきました。学生間のプログラムというのは自身も昔参加させていただきましたし、同行もしました。しかしながら、「大人同士」となるとまた話は別。学生とはちょっと違った目線が必要になってきますし、滞在中の活動内容もただ「見て回る」だけというわけにはいきません。



中西部日米会議でのアイオワ州知事の挨拶の様子

例えば、一つは訪問期間中の滞在场所。もちろん、きっと真っ先に誰もが考えるのはホテルだと思います。「大人」ですから。しかしながら、今回私たちアイオワ側が提案したのはホームステイ。もちろん、経費云々の狙いがあったのも事実ですが、一番は「大人だからこそ」体験して欲しい、という想いでした。ビジネスが目的だからビジネスの現場だけを、教育が目的だから教育現場だけを…それだけでは本当の意味での交流にはならないのでは? 現地での生活そのものを一緒に体験することで、これから先のヒントが見えてくるかもしれない、もっと深い部分での意見交換ができるのではないかと、そういう想いでホームステイを提案させていただきました。

やはり、日本側の皆さんは初め躊躇しておられましたが、説得の甲斐あって同意していただき、実際にプログラムを執行。滞在期間中は様々な企業や団体を実際に訪問、そして意見交換とネットワーキングの場も

積極的に設けました。そして、最終日。いただいたのは「ホームステイをして本当に良かった。あの時、断ってホテルを取らずに正解でした! 今までで一番貴重な体験になりました」という嬉しいお言葉と、他の何にも代え難い、皆さんの満面の笑みでした。



お寿司ワークショップ (中学校) の様子

空港でお見送りをしたあと、アイオワ側の関係者たちと全員でハイタッチをして回ったのは言うまでもありません。

私たちが生きているこの地球には180以上の国が存在し、違う言語を使い、それぞれの歴史に伴って培われた伝統と文化に沿って生活をしています。ですから、「これはAだ」と今まで思い生きていたのに、「いや、これはBだ」と言われてしまうと驚愕してしまうのは誰しもあることで、仕方ないことだと思います。でも、決してどちらの間違ってはいない、悪いことではない。反対に、言語も文化も違う、そんな中にもあっと驚く共通点があったりする。それが、異文化交流の面白さだと思います。

私もこの2年間はJOIコーディネーターとして、日本語や日本の文化に関する話を沢山してきましたが、その上で確立したのは自分の中にある日本人としての誇りと同時に「地球人」である、という想いです。

違いと共通点の両方を見だし、それを互いに尊重し合える。そんな関係を築くために、これから先も小さなことからでもコツコツと自分なりに歩みを進めていけたらと思います。

この2年間は本当に私にとって人生の転機と言っても過言ではないほど、大きな一歩でした。

挑戦して良かったと心から思います。本当にありがとうございました!



アイオワ姉妹都市プログラムの皆さんと

私は日本人。あなたは〇〇人。そして、私「たち」は「地球」人!





## JOI 第12期

(2013年8月～2015年7月)

## 中 博美

Naka Hiromi

ウィスコンシン大学マディソン校  
東アジア研究センターThe University of Wisconsin-Madison  
Center for East Asian Studies  
(ウィスコンシン州マディソン)

父親の転勤に伴い12年間韓国に在住。大学卒業後、日本語教師養成講座を受講。日本語教育能力検定試験に合格。日本語教師としてイギリス、中国、ロシアで勤務。日本文化発信、異文化理解の活動に賛同し、JOIプログラムに参加。

子供たちに折り紙などの工作を教えた時に言われました。あくまでも私の印象ですが、アメリカで出会った子供は、私の知る日本の子供と比べ、わからない時にすぐに助けを求める傾向にあると思います。そして周りの人は、助けを求める子にすぐに手を貸します。これらの行動は「自分の要求を伝えられる」「助け合う」という点では優れた姿でしょう。ただ、これでは子供の成長には繋がりません。そこで私が子供たちに伝えたのは、

「説明をしっかり聞いてゆっくりやれば必ずできるから、やり遂げろ」という事でした。そして、子供たちが自分の力で出来るまで何度も何度も説明をしました。また、既に出来る子達には、「助けるとは『やってあげる』ことではなく、『出来るように教えてあげる』こと」だと伝えました。そして、その様子を見ていた大人たちに言われたのが“You are patient”の言葉でした。

以前、“Struggle Means Learning: Difference in Eastern and Western Cultures (試行錯誤のものがきは学び: 東と西の文化の違い)”という記事を読んだことがあります。アメリカの記者が日本の学校を訪問して書いた記事で、内容を簡単に言うと—西では、試行錯誤によるものがきは「自分は出来ない人間」という良くないイメージを本人に抱かせるという恐れがあり、プロセスはさておき、到達した結果を重視して褒める傾向がある。対して東では、試行錯誤のものがき自体に「諦めない」「粘り強い」「努力家」というポジティブな思考を見出す—というものです。これを読むと、アメリカの褒めて育てる文化が分かります。そして、私の指導が、東洋的であったことも。



体験型アクティビティ①

ただ、私の指導を、現地の方はpatientとポジティブに受け止めてくれました。文化の違いとその良さを指導方法でも示せたのは、(意図的にやったわけではありませんが)JOIらしい活動でした。

## 3. フランシーのハグ

学校訪問は単発のものが多いのですが、機会があれば、同じクラスを何度も訪問することもあります。フランシーのクラスには、週に3日、5ヵ月間通いました。フランシーは3年生の女の子。自分に余り自信が持てない様で、自分を悪く言い、写真に写るのも嫌がります。クラスメイトと楽しく話をするものの、触ったり触られたりすることも嫌がる子でした。そのクラスには定期的に通っていたこともあり、子供たちは私にとっても懐いてくれていました。フランシーも私のことを好いてくれ、クラスに行くとき側に来て、いつも私を褒めてくれました。そして、そのクラスでの仕事の最終日。クラスの皆と写真を撮りましたが、フランシーは写真に入りませんでした。



体験型アクティビティ②

授業が終わって帰る時、クラスの子供たちが次々にハグをしてくれました。フランシーも近くに居ましたが、ハグがしたくても出来ないという様子でした。そして、いよいよ帰ろうとした時、フランシーが私にハグしてきたのです。短いハグ。でも、精いっぱいハグでした。

この時のことを思い出す時、いつも思います。自分がJOIとしてどれほどの仕事が出来たかは分からない。でも、少なくとも、一人の日本人である私を、一人のアメリカ人の女の子が好きでいてくれたことは確かだと。それはJOIのような草の根交流のプログラムにおいて、本当は一番大切なことであるのだろうと。

私がこの2年間で関わった人達が少しでも日本を理解し、愛してくれたことを願います。また、未来のJOIコーディネーター達が貴重な体験を通して日米相互理解の体現者となることを願っています。



学校訪問

2年間の任期が終了しました。終わってみると一瞬の様な時でしたが、「365日×2」日分の思い出があります。その中から、特に印象に残った3つの出来事について記します。



国際イベント

## 1. Holiday Folk Fairのグランプリ受賞

ウィスコンシン州では、毎年ミルウォーキー(州最大の町)でHoliday Folk Fairという国際文化祭りが開催されます。70年以上も続く、歴史のあるお祭りです。元々ルーツの異なる住民の相互理解のために生まれたお祭りだそうで、今でも国際理解教育のツールとして親しまれています。様々な国を代表するブースが立ち、売店では珍しい国の伝統料理がいただけます。他にも各国のダンスや歌、料理のデモンストレーションが楽しめるステージもあり、3日間に渡る規模の大きなお祭りです。

私は2年続けてこのお祭りでも働きました。1年目は子供向けのアクティビティのコーナーと、日本食のデモンストレーションを担当しました。また、2年目はミルウォーキー在住の日本人Dさんと協力し、日本ブースのオーガナイザーとして働きました。そして、この2年目に、日本のブースはBest of the Fairという、このお祭りにおける最高の賞を受賞したのです。この賞は、各国のブースの中から、入場者の投票と審査員の審査の総合点によって選ばれます。受賞された喜びは勿論ですが、何より、入場者の投票による受賞だということが喜びを大きくしました。

## 2. “You are patient (辛抱強い)”

JOIの2年間で現地の方に最も多く言われたのが、この言葉です。これは特に、



## JOI 第12期

(2013年8月~2015年7月)

## 仲野 麻未

Nakano Asami

テネシー大学チャタヌーガ校  
The University of Tennessee  
at Chattanooga  
(テネシー州チャタヌーガ)

大学学生時に米国ウィスコンシン州立大学に編入卒業。日本で中学校英語教諭、小学校英語講師として5年間半勤めた後、JICAの日系社会青年ボランティアとしてアルゼンチン日本語教育連合会で2年間活動。主に現地の日系社会の青少年の日本文化、日本語学習者支援を行い、JOIプログラムに参加。

1年目に続いて、2年目の活動もまたパートナー校であるチャータースクール、私立の小学校ブライツスクールを中心に、アウトリーチを行いました。特に2年目は1年目のネットワークを活かして活動範囲をナッシュビル、メンフェス方面にも拡大してより多くの学校を回ることができました。ナッシュビルまでは片道2時間半、メンフィスまでは片道6時間かかりました。また2年目をいうことで前年出会った生徒の成長をみることでできとも励みになりました。



ブライツスクールと水戸英宏小学校の子どもたち

また2年目は新しいチャレンジとしてブライツスクールと茨城県水戸市にある私立英宏小学校との交流を推進し、クリスマスカードの交換やビデオ交流をしたあと、6月にブライツスクールより希望者13名を連れて日本での10日間のジャパントリップを企画しました。生徒達は日本のご家族の家に1週間ホームステイをし、日本の学校を経験したり、東京一日観光ツアーを体験したりしました。また引率で本校の校長のOJモーガン氏も日本に來日し、今後もこの交流を継続予定です。



アウトリーチ風景(中学生)

また8月には日本から15名の中学生を受け入れました。どちらの子どもたちも新しい体験を沢山して、これからも友好を深めていって欲しいと思っています。

大きなイベントとしては、お弁当ワークショップとアジア・デーでの"Walk in U.S., Talk on Japan" ("歩こうアメリカ、語ろうニッポン")プログラムの受け入れがありました。お弁当ワークショップはボストンよりフードコーディネーターのデブラ・

サミュエルズさんにテネシー大学チャタヌーガ校にお越しいただき、日本人のボランティアの方々の協力の下、当日40名分の日本のお弁当を作成するというワークショップを行いました。

アメリカでの日本食の人気もあって、あっという間に定員に達したイベントでしたが、3日間かけてお弁当の中身をすべて手作りし、本ワークショップでは実際に参加者がそれぞれのお弁当を作るという内容でした。目にも鮮やかな日本のお弁当にどの参加者もとても満足そうでした。

またデブラさんのとても温かいお人柄に私を含め、ボランティアで手伝った皆さんがファンになりました。このように現地の有効な人材を活用し、日本のいいところを現地の人々にアピールすることで多くの日本のファンが増えていくように感じました。また食べ物には抵抗無く新しく文化に入っていく入り口としてとても有効だと感じました。

このイベントをきっかけに現地の日本人のご家族、駐在者を中心に"チャタヌーガで日本文化を伝えるチームTEAM Chattanooga"を結成し、その後色々な活動を手伝ってくれる仲間ができました。

また、「歩こうアメリカ、語ろうニッポン」のイベントは内閣府が企画しているもので、今回は齋藤元大使をチームリーダーとして5人の専門家がテネシー大学のアジア・デーにやってきました。参加した大学生、教授、地元の方々総勢80名を5つのグループに分け、それぞれのスピーカーの方達とディスカッション形式で対話をしてもらいました。日本の経済のことから女性の地位の問題、日本の大学生の生活などバラエティーに富んだメンバーとの対話は、大学生にとってとても刺激になったと思います。

また2年目もアジアプログラムではテネシー州の中学、高校の社会の先生達のためのワークショップを冬休み2日間に渡って開催しました。私の担当は日本の昔遊び

(ふくわらい、年賀状作り、百人一首など)、また風呂敷の使い方の講座、日本人の高校生の生活などをレクチャーしました。今後もこの先生方が授業の中で少しでも日本のことを紹介する折に取り入れてくれたらいいなと思っています。



チームチャタヌーガ

2年間は振り返ってみるとほんとにあっという間でした。天職という言葉が当てはまるかわかりませんが、JOIの活動は私にとって毎日がとても楽しくどの活動もとても心に残っています。普段は全く出会うことのないであろう人口1,000人の町のmiddle of nowhereと呼ばれる土地にすむ中学生と、実際に一つの教室で顔と顔を合わせて授業ができること。目の前で日本の文化に目を輝かせて待っていてくれるアメリカの生徒さんたちがいることはとても幸せでした。このチャタヌーガというテネシー川のほとりのとても美しくかわいい街で地元の人たちにとっても温かく迎えていただいたこと、また多くの方が日本に興味を持っていてくれることをとても嬉しく思います。



チャータースクールの子どもたち

このような機会を与えてくださったローラシアン協会、国際交流基金の皆様から感謝申し上げます。また2年間見ず知らずの私をホームステイで受け入れてくれたモーガンファミリーと、温かく職場の一員として受け入れてくれたテネシー大学チャタヌーガ校のアジアプログラムに感謝いたします。

今後はまた2年間本大学に残って大学院生として日本語のクラスの指導とアウトリーチの継続をすることになっています。地元の人たちと協力しながらチャタヌーガでもっと日本のことを好きになってくれる人が増えるように、これからも楽しく活動できたらと思います。





## JOI 第12期

(2013年8月~2015年7月)

## 宮武 祐見

Miyatake Yumi

アラバマ大学 タスカルーサ校  
The University of Alabama  
(アラバマ州タスカルーサ)

学生時代のアメリカ滞在をきっかけに、異文化交流・異文化理解に興味を持つ。教育現場で勤務をしながら日本語教師養成講座を受講。英語を日常生活で使いたい、日本について知ってもらいたいという思いから応募。

今でも2年前の赴任前研修で「派遣先はアラバマ州タスカルーサ市です」と言われた時のことを鮮明に覚えています。アラバマってどこ？スーパーバイザーはどんな人？何が求められているの？とJOIとして派遣されることが急に現実味を帯びた瞬間でした。

この2年間、JOIはチャレンジ精神と自立心を養う機会を与えてくれ、そして人の温かさを教えてくれました。アクセルとブレーキがどっちだったかすらも忘れていたほどの私が毎日車を乗り回すようになったり、家や車のことなどで問題が出た時に管理人や修理屋に一人で行ってどうにか解決しようとする勇気を与えてくれたり、多くのことを経験し、「生きる力」を存分に育てられました。



お弁当ワークショップ

アメリカ生活を振り返って今思うことは、もっと長くいられたらな、ということです。前半1年はなんとか生活を立ち上げ、仕事先を見つけ、一刻も早く慣れるという毎日でしたが、後半2年はどうやって自分が帰国した後に繋がるか、残された時間で悔いなく何が出来るか、ということに焦点を当てていきました。

幸い2年目は1年目に行った活動が口コミで広がり、多くの方々から仕事の依頼を受けました。欲張りな私は予定が重ならない限り断らない、というスタンスで仕事を受け、2年目はほぼ毎日のようにアウトリーチを行うことが出来ました。これは毎週定期的にあった小学校訪問から単発の

プレゼンテーション、イベントまで様々です。時には同じ日に3カ所で授業を行なった日もありました。ある日は5歳児に向けてのプレゼンテーションの1時間後に50~60代の方々話す機会があったり、なかなか出来ない貴重な体験をしました。

学校訪問に関しては、1年目はどちらかという日本にもともと興味がある子どもたちが多かったのに対し、2年目は日本について全く知らない、興味がない、という

子どもたちと接することが多くありました。At-riskと言われる子どもたちのクラスに行くことが週の半分以上あり、それは自分にとって挑戦でした。At-riskという言葉の定義は様々で、英語を第二言語とする子ども、ADHDの子ども、低所得の家庭の子どもなど、授業を受ける際あらゆる面で支援を必要とする子どもたちを大きく一括りにしたものです。私が訪問したのは集中力の維持が難しい子どもやいじめっ子たちが混ざっている小学校2クラスと中学校1クラスでした。これらのクラスから仕事の依頼がきたときは、「もし自分がここで行かなかったら、今後子どもたちは日本、もしくは外国について知る機会があまりないかもしれない」という使命感で引き受けました。しかし、現実はその甘くはありませんでした。授業中に取組み合いが始まったり、暴言の数々、怪我の危険があるからと活動が制限される場面があったり、自分の無力さを感じることもありました。それでも、数ヶ月の授業が終わる頃には活動に意欲的になっていたり、日本に行ってみたいと言ってくれる子どもなど初めと態度が変わっている子どもがいて、それを見たときは感慨深かったです。

他にも2年目でイベントの進め方が少しずつ分かってきたころ、多くのイベントを計画し、そして運営を任せられるようになりました。2年目には9つの大きなイベントを行いました。その中で印象に残っているのは2014年10月に行なわれたお弁当ワークショップと2015年3月に行われた"Walk in U.S., Talk on Japan"（「歩こうアメリカ、語ろうニッポン」）プログラムです。お弁当ワークショップは国際交流基金ニューヨーク支部主催のイベントで、ボストンから料理家のデブラ・サミュエルズさんをゲストスピーカーとしてお招きし、参加者に日本のお弁当文化について知ってもらい、事前に調理したおかずをお弁当箱に

詰める体験をするというものでした。高校生、大学生、コミュニティーの方々52名が参加し、彩り豊かな日本食を楽しんでいました。



大学でのプレゼンテーション

「歩こうアメリカ、語ろうニッポン」は内閣府主催のイベントで、政府に選ばれた5名がゲストスピーカーとして訪米し、それぞれが日本の政治、経済、女性の活躍などについて話す参加型のシンポジウムでした。ここでは会場決め、ケータリングの手配、チラシやウェブサイトの広告作成、ボランティアのコーディネート、会場設営、物品手配、プログラム作成など多くのことを経験させて頂きました。当日はゲストスピーカーと参加者およそ130名による意見交換が活発に行なわれ、とても有意義なシンポジウムになりました。両イベント後に聞いた「またやってほしい」という参加者の声と達成感は忘れられません。

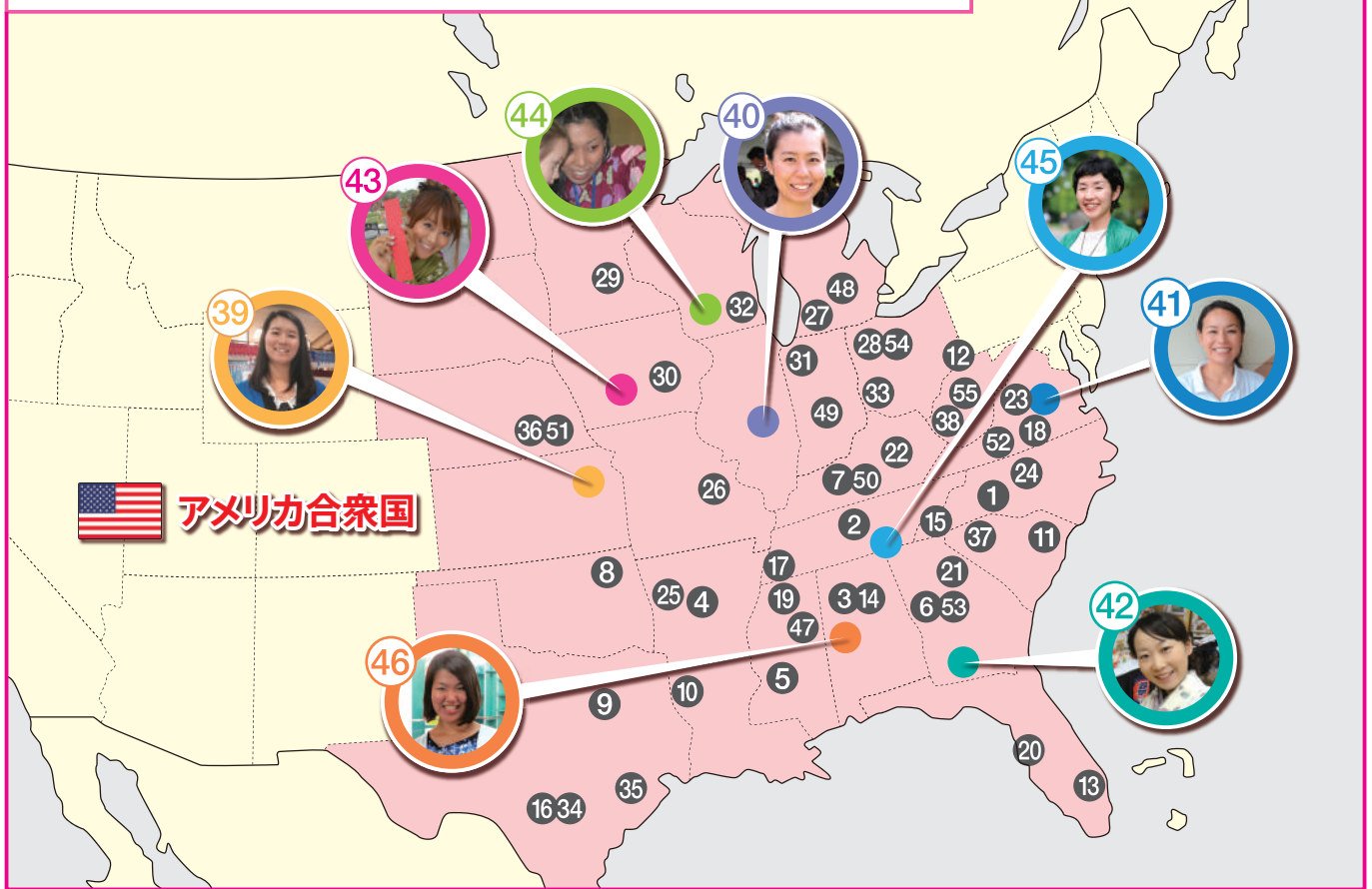


お世話になった方々

JOIは自分が幼い頃からやりたいと思っていたこと一つ一つを叶えてくれる、そんな夢のような仕事でした。微力ながらも2年で築き上げた学校やコミュニティーと大学の繋がりが今後も続き、そして更に広がっていくことを願っています。このような素敵な機会を与えてくださった国際交流基金日米センター、ローラン協会、アラバマ大学、そして多くの皆さんに心から感謝申し上げます。

▼ これまでの派遣先一覧

派遣対象地域(南部・中西部)



- 1期**
- ① 小阪田 佳子 サウスイースト・オリガミ/スミス・アカデミー
  - ② 倉辻 厚子 中部テネシー州立大学日米プログラム
  - ③ 久田 かおり アラバマ日米協会

- 2期**
- ④ 鈴木 丈夫 アーカンソー日米協会
  - ⑤ 徳田 淳子 ミシシッピー・カレッジ

- 3期**
- ⑥ 高橋 祐子 ジョージア日米協会
  - ⑦ 福原 くみこ ケンタッキー日米協会
  - ⑧ 横野 由起子 タルサ・グローバル・アライアンス  
オクラホマ東アジア教育インスティテュート

- 4期**
- ⑨ 安藤 良子 ダラス/フォートワース日米協会
  - ⑩ 田中 美樹 南部多文化センター
  - ⑪ 村田 有紀子 コスタル・カロライナ大学

- 5期**
- ⑫ 織田 美千子 ベサニー大学
  - ⑬ 木谷 公子 森上ミュージアム
  - ⑭ 小島 祥子 アラバマ日米協会

- 6期**
- ⑮ 西脇 笑子 ウェスタン・カロライナ大学
  - ⑯ 増田 環 サンアントニオ日米協会
  - ⑰ 松下 佐智子 メンフィス大学国際プログラム&サービスセンター
  - ⑱ 山崎 和子 ハリファックス公立学校区
  - ⑲ 山田 悠花子 クロフト・インスティテュート  
・フォー・インターナショナル・スタディース

- 7期**
- ⑳ 荻島 光男 南フロリダ大学国際センター
  - ㉑ 服部 聖 ジョージア大学アジア研究センター
  - ㉒ 福崎 恵子 ケンタッキー大学アジアセンター
  - ㉓ 鈴木 和子 バージニア大学東アジア言語文学文化学部

- 8期**
- ㉔ 青木 真子 ウェイク・フォレスト大学東アジア言語文化学部
  - ㉕ 木幡 陽子 アーカンソー大学フォートスミス校
  - ㉖ 森下 佳南 ウェブスター大学
  - ㉗ 吉本 道子 ウェスタン・ミシガン大学曾我日本センター
  - ㉘ 米倉 夏江 フィンドレー大学

- 9期**
- ㉙ 佐藤 嘉ン奈 ミネソタ日米協会
  - ㉚ 日高 夢 アイオワ大学国際プログラム
  - ㉛ 光林 瑠美 バルパライソ大学
  - ㉜ 森 文彦 インターナショナル・インスティテュート・オブ・ウィスコンシン

- 10期**
- ㉝ 大野 麻未 グレーター・シンシナティ日米協会
  - ㉞ 熊代 智恵 テキサス大学サンアントニオ校東アジア・インスティテュート
  - ㉟ 鶴田 孝俊 ヒューストン日米協会
  - ㊱ 星野 麻衣 ネブラスカ大学オマハ校国際プログラム
  - ㊲ 松岡 愛美 ウォフォード・カレッジ
  - ㊳ 山田 梓 マーシャル大学

- 11期**
- ㊴ 乗上 恵里香 カンザス大学ローレンス校東アジア研究センター
  - ㊵ 蓮井 頼子 イリノイ大学東アジア・太平洋研究センター
  - ㊶ 湯田 晴子 バージニア大学アジア・インスティテュート

- 12期**
- ㊷ 片岡 愛 バルドスタ州立大学
  - ㊸ 庄寄 由紀 カルチャーオール
  - ㊹ 中 博美 ウィスコンシン大学マディソン校東アジア研究センター
  - ㊺ 仲野 麻未 テネシー大学チャタヌーガ校
  - ㊻ 宮武 祐見 アラバマ大学タスカルーサ校

- 13期**
- ㊼ 岩田 千江子 ミシシッピー州立大学人文学科
  - ㊽ 金田 紗弥 ミシガン州立大学アジア研究センター
  - ㊾ 常盤 千明 インディアナ日米協会
  - ㊿ 西村 瑛美衣 ケンタッキー日米協会
  - ㉑ 野村 忠 クレイトン大学アジアン・ワールドセンター

- 14期**
- ㉒ 澤邊 大輝 フェラム大学
  - ㉓ 辰川 はる奈 ジョージア日米協会
  - ㉔ 飛弾 文音 フィンドレー大学マッツァ美術館
  - ㉕ 本間 恵 ウェストバージニア州教育省